楽しさがとまらない

MACAU
マカオ

しあわせ感じて
旅しよう

制作・発行©マカオ観光局　www.macautourism.gov.mo
（2015年発行）

楽しさがとまらない

MACAU
マカオ

しあわせ感じて旅しよう

客室数3000室を数える巨大リゾートのザ・ヴェネチアン・マカオのショッピング・モール「ショップス・アット・ヴェネチアン」は近未来のヴェネツィアのイメージ。

A Brand New Macau

Cotai

「ここはどこ!?」だれもが息をのむコタイという楽園へ

マカオといえばポルトガル伝来のノスタルジックな世界遺産で知られるが、一方では最新の巨大リゾートがいくつも建ち並び、カジノ、ショッピング、グルメ、スパ、ショーなどが楽しめる夢の街「コタイ」が大人気。夢にあふれた非日常空間で、心身ともに思い切りぜいたくな滞在を楽しめる。

パブリックエリアではマジックショーやミニコンサートなどのパフォーマンスも。とにかくゲストを飽きさせない工夫がみごと!

子ども向けのアトラクションや催しも豊富で家族そろって楽しめるコタイはまさに「夢の国」。シェラトン・マカオ・ホテル・コタイ・セントラルではシュレックやカンフー・パンダなどのキャラクターのパレード、記念撮影や、朝食をいっしょに食べられるプランも。

気の合った友人同士やカップルで。夫婦やファミリーで。旅のスタイルや年齢を問わず、だれもが楽しめるコタイ。エンターテイメントやショッピングなど一流の施設が集結した巨大リゾートで、究極の休日を満喫しよう。

コタイのみで完結する極上のリゾートライフ

ショッピングやショー、カジノなどのエンターテイメント、そして豊富なグルメ探訪など、旅行者がリゾートライフに求めるすべてが一カ所で完結できるのがコタイの魅力。日中はカジュアルからラグジュアリーまで幅広いファッションから、コスメティック、お土産までそろうショッピング・モールでショッピングを思い切り楽しみ、そのままポルトガル料理をはじめ国際色豊かなディナーを満喫。さらにコタイならではのエンターテイメント体験に就寝前のスパで一日を締めくくれば、コタイから一歩も出ることなく、極上のリゾートライフが味わえる。

また子ども連れファミリーならではの楽しみ方も。ホテルのキッズ施設で、童心に返っていっしょにアトラクションを楽しんだり、専門スタッフに子どもを預け、夫婦水入らずのリゾートライフを過ごすのもおすすめだ。エンターテイメントの目玉は専用シアターで上演される「ザ・ハウス・オブ・ダンシング・ウォーター」。世界的巨匠フランコ・ドラゴーヌ氏製作・演出のショーで、アジア一のエンターテイメント都市マカオを実感する瞬間だ。

充実のショッピング・モール 800軒以上ものショップが大集結

コタイを形成する各リゾート、すなわち「ヴェネチアン・マカオ」、「フォーシーズンズ・マカオ・コタイ・ストリップ」、「シティ・オブ・ドリームズ」、「サンズ・コタイ・セントラル」、「ギャラクシー・マカオ」では各々ショッピング・モールを備え、ショップ総数はコタイ全体で800軒以上（2015年中に900軒以上の予定）。

モール間は徒歩（無料のシャトルバスあり）で楽々移動でき、コタイならではの非日常的なにぎわいを味わいつつ買い物三昧の休日を過ごせる。

ショップス・アット・フォーシーズンズのTギャラリア・マカオ by DFSはラグジュアリーな雰囲気を満喫できる。

毎日が祝祭日のコタイで体感する沸騰するような期待に満ちた時間

コタイ最大のショッピング・モールがザ・ヴェネチアン・マカオのショップス・アット・ヴェネチアン。330以上のショップ、30以上のレストランやフードコートが軒を連ね、終日ここだけで楽しめる。

圧倒的肉体的パフォーマンスと切ない恋の物語が織り成す「ザ・ハウス・オブ・ダンシング・ウォーター」。シティ・オブ・ドリームズの専用シアターで繰り広げられる壮大なスケールのショーで、オリンピックプール5個分の水を用い、ステージが一瞬にして帆船が航行する大海原へと切り替わる演出は圧倒的。そして一糸乱れぬみごとな演技を披露する合計7人のパフォーマンス。その説得力は台詞など一切不要のものとし、見る者に熱いメッセージを送り続ける。

美食ダイニングめぐりを満喫したら心の底からくつろげる癒しの空間へ

カジュアルなフードコートからお洒落して出かけたいファイン・ダイニングまで、さまざまなレストランが各リゾートに軒を連ね、旅行者を魅了し続けるコタイ。ゆったりと食事を満喫したら、ホテルのリゾート施設を使いこなし、コタイならではの贅沢な休日を。

A Brand New Macau
Cotai
Gourmet, Food and Relaxation

世界の食めぐりと充実のホテルライフ

多彩なレストランが一堂に会するグルメシティでもあるコタイ。本場の中国料理からフレンチやイタリアンなどの西洋料理、タイ料理などアジア各地のローカルフード、エキゾチックなフュージョン料理、そして現地でも人気の高い和食といった具合に、世界中からの一流シェフを擁するファイン・ダイニングが集まり、毎食飽きさせない。居ながらにして世界の食めぐりが楽しめるのが特徴だ。

心地よくお腹いっぱいになったら食後のリラックスタイム。ホテルゲストのみが享受できるホテルライフを満喫しよう。水着に着替えてプールサイドでのんびりリゾート気分を味わったり、ドレスアップしてバーやラウンジでカクテルやアフタヌーン・ティーを楽しんだり。また街歩きで疲れた身体に感謝の気持ちを込めて、一日の締めくくりの極上スパ三昧はいかが。

やりたいことが多すぎるから、せっかくの広々とした部屋で過ごす時間が不足しがち——そんなうれしい悩みもここコタイならではだ。

コタイのファイン・ダイニングでは料理のみならず内装を含めた雰囲気を味わおう。パンヤンツリー・マカオのシグニチャー・レストラン、ベロンはご覧の通りの華やかさ。

(右)レストランも国際色が豊かなコタイ。世界各国からの観光客がインド料理に舌鼓を打つザ・ヴェネチアン・マカオのゴールデン・ピーコック。ランチはカジュアルなブッフェ、ディナーは盛装でアラカルトと、メリハリの利いた使い方ができるレストランが多い。(左)中国料理は広東、上海、北京など各地の名物料理が楽しめる。

(上)シティ・オブ・ドリームズのザ・テイスティング・ルームをはじめフレンチやモダンなインターナショナル料理の名店も多い。(下)旬の食材をふんだんに取り入れたマカオの西洋料理は実にハイレベル。モダンな味付けや盛り付けをシェフたちが競う(ザ・テイスティング・ルーム)。

地元ならではの広東料理は各リゾートが特に力を注ぐジャンル。料理の味付けのみならず、店ごとに趣向を凝らしたゴージャスな内装をも堪能できるフォーシーズンズ・ホテル・マカオ・コタイ・ストリップの「紫逸軒」(ジーヤッヒン)。

ファミリーや仲間で貸し切って楽しいスイートルーム。各ホテルが多彩なスイートをそろえるほか、ザ・ヴェネチアン・マカオは全3000室すべてがスイート構成(写真はリアルト・スイート)。

予約をしてから訪れたいスパ。ディナーの後に楽しむのも手だ。リゾートを思わせる雰囲気のなか究極の癒し体験が満喫できるパンヤンツリー・スパ。

(上)あえて街中の観光には出ず、プールサイドでゆったり過ごす休日もいいもの。雰囲気はホテルごとに異なるが、リゾート気分にあふれる点で共通する。(下)ホテルゲストならずとも利用できるスパは、各ホテルが自慢のブランドをラインナップ。シェラトン・ホテル・マカオ・コタイ・セントラルのシャイン・スパ、デラックス・カップル・ルーム。

洗練された雰囲気のシェラトン・マカオ・ホテル・コタイ・セントラルのクラブラウンジ。クラブルーム滞在客が利用できる。

クラブラウンジを利用してワンランク上のサービスを

シェラトン・マカオ・ホテル・コタイ・セントラルやグランドハイアットマカオ、ホテル・オークラ・マカオ、フォーシーズンズ・ホテル・マカオ・コタイ・ストリップなどコタイのホテルの多くにはワンランク上のサービスが受けられるクラブラウンジを備える。専用の客室やフロア(クラブルームやクラブフロア等)に滞在するゲストのみが利用できるラウンジで、専用の朝食はもちろん夕刻のカナッペ&カクテルアワーなどが楽しめ利用価値が高い。

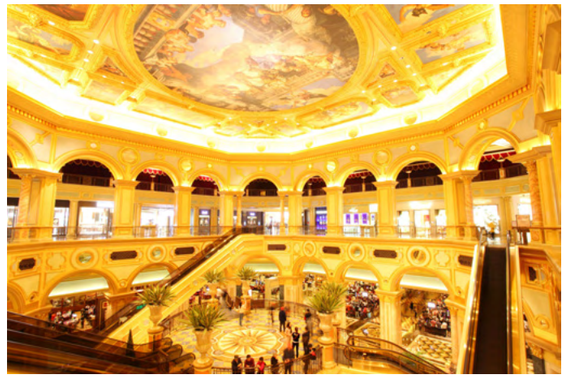
サービスの内容や宿泊料金等は、各ホテルへ問い合わせを。

コタイの全景。向かって左から「シティ・オブ・ドリームズ」、「サンズ・コタイ・セントラル」、「ザ・ヴェネチアン・マカオ&フォーシーズンズ・ホテル・マカオ・コタイ・ストリップ」、「ギャラクシー・マカオ」。一方、水辺を挟んだ手前にはかつてポルトガル人が別荘としたタイパ・ハウス・ミュージアムが建ち並び、対岸のコタイと新旧の好対照。マカオ国際空港に隣接するためアクセスが車で10分と便利なうえ、タイパの旧市街からは徒歩圏内。

非日常空間のコタイでかなえるとびきりの休日の夢

A Brand New Macau Cotai

世界遺産の旧市街と、巨大リゾートが林立するコタイ。対照的なふたつのエリアが時空を越えた旅へと誘っている。初めての滞在では、まずはマカオの新しい顔、近未来風のコタイで、とびきりの休日を過ごしてみよう。



ザ・ヴェネチアン・マカオはコタイのホテルのなかでも屈指の規模を誇る一大リゾート。巨大なカジノエリアやエントランスから延びる回廊は圧倒的。

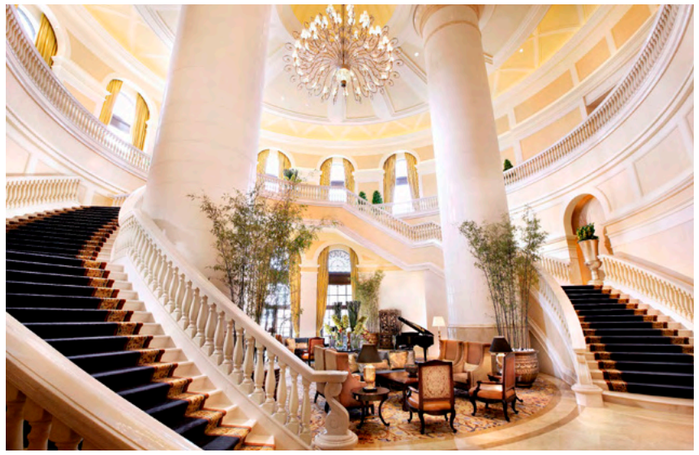
ギャラクシー・マカオのメインロビーでは巨大なダイヤが降臨する光と水、音の織りなすショー「フォーチュン・ダイヤモンド」が人気。

ホテルゲストのみが利用できるスイミングプールもホテルによって持ち味が異なって興味深い。ギャラクシー・マカオのプールは広々とした砂浜と打ち寄せる波が大迫力のビーチリゾート。

中世からのゆったりとした時間の流れを一転、取り戻さんとするかのように全力疾走を続けてきたコタイは今、色とりどりの電飾が近未来を思わせる風貌で、遠来の観光客の前に忽然と立ち現れる。

進化を続けることこそがコタイのアイデンティティ。そしてその新しさゆえに、コタイは世界中からの観光客を魅了し続けている。

「旅」という非日常の時間を、非日常の空間で過ごすこと——。この実現のため、コタイでは見る者の度肝を抜く仕掛けやアトラクションが豊富。エルビス・プレスリーやブルース・スプリングスティーンなどロックスターたちの愛器が飾られた「メモラビリア」は圧巻だ（ハードロック・ホテル・マカオ）。



ゴージャスかつ洗練されたロビー周りが非日常への扉を開けるフォーシーズンズ・ホテル・マカオ・コタイ・ストリップ。

中世の教会群が建つマカオに近未来風巨大リゾートが出現

広大な中国大陸の南東沿岸に位置する小さな半島。世界地図上のほんの小さな「点」に過ぎないマカオに、アジア各国との交易を意図したポルトガル人が来航し、後世には世界遺産に登録されることとなる教会群が相次いで建てられたのが、16世紀から17世紀にかけての大航海時代。以来マカオでは西洋と東洋との文化が交差し、互いに融け合いながら時を刻んできた。

時は流れて21世紀、世界遺産の旧市街から橋を渡った広大な空間に、アジアを代表する巨大リゾートエリア「コタイ」が建設された。とはいえコタイを表す際に過去形はふさわしくない。ここは常に現在進行形の街だからだ。

2007年のザ・ヴェネチアン・マカオの開業を以って誕生して以来、

GOOD OLD MACAU

西洋と東洋が共存し はや450年以上

マカオ半島の南側はポルトガルの風情を今なお残す一方で、北側には活気あふれる中国色濃い街並みが展開する。そんなマカオ半島北側にあって、伝統的な茶樓の雰囲気を守る龍華茶樓。街歩きの途中で茶ランチはいかが？

近未来風のコタイと打って変わって郷愁あふれるマカオの旧市街。
コタイから車で15分ほどのマカオ半島では
ポルトガル伝来の南欧文化とのどかな華南文化が混ざり合い、
独特の風情を醸し出している。

GOOD OLD MACAU

歩いて実感する 中国のなかのポルトガル

世界遺産の街歩きはここ、セナド広場から始めよう。石畳のカルサーダスと噴水、歴史的な洋館とが醸し出すマカオの原風景のある場所。

インド航路を開拓したヴァスコ・ダ・ガマは、マカオに投錨することこそなかったが、ヴァスコ・ダ・ガマ公園にその偉業を伝える。ガマは1497年にリスボンを出港、喜望峰を回航してカルカッタに到達。カモンエスとともに、リスボンのジェロニモス修道院で眠る。

1513年、マカオからほど近い珠江の河口付近に上陸したとされるポルトガル艦隊指揮官ジョルジェ・アルバレス。中国を訪れた最初のポルトガル人で、ポルトガル人航海者が新たな地を「発見」するたびに建立した石碑「発見の碑」を背負い繁華街に立つ。

ポルトガルの国民的詩人ルイス・デ・カモンエスはマカオに草庵を結び、詩作にふけったという。代表作「ウズ・ルジアダス」は大航海時代のポルトガルの栄光を詠い、「ここに地終わり、海始まる」の一節で知られる。彼の像は民政総署とカモンエス公園にある。

中国初の西洋式劇場で楽しむ マカオ・オーケストラの公演

1860年に建てられた新古典様式のドン・ペドロ5世劇場は、中国で初めての西洋式劇場として世界遺産にも登録。19世紀に華やかな社交の場であった劇場は今なお現役で、コンサートや演劇に利用されている。特にマカオ・オーケストラの公演は日程が合えばぜひ楽しみたい。入場無料（要整理券）の公演もあり、マカオ市民に密着した活動がうかがえる。公演スケジュールや料金などは公式ウェブサイト（www.icm.gov.mo/om/）で確認を。

（上）聖オーガスティン教会やロバート・ホー・トン図書館など世界遺産が数珠繋ぎに現れる半島南部に位置。（下）世界遺産の建物で聴くオーケストラの演奏は格別。同オーケストラはドン・ペドロ5世劇場以外に聖ドミニコ教会等でも定期的に演奏している。

大航海時代のポルトガルのシンボルのひとつで、現在のポルトガルの国章のモチーフにもなっている天球儀。かつて航海者たちの命運を握った天球儀のオブジェは今日、マカオの中心地セナド広場で輝き続ける。

美しい装飾絵タイルのアズレージョはポルトガル人の置き土産。街のあちこちで目にするほか、マカオでは街路名の標識にもアズレージョが用いられている。

マカオ半島中央のモンテの丘に、1617年に築かれたモンテの砦。当時のマカオ最強の軍事施設で、オランダとの会戦時にはこの砦から放たれた砲弾がオランダ軍の弾薬庫に的中、不利だった戦局を一変させた。現在は砦内部にマカオ博物館がある。

宗教改革の結果、誕生した新教国オランダがマカオの持つ富に食指を伸ばしたことから、ポルトガルとオランダは、マカオを舞台にしばしば戦火を交える。マカオ半島七つの丘の最高峰ギアの丘には強固な砦が築かれ、1622年のオランダ軍のマカオ強襲上陸時に戦略上、重要な役目を担った。

ポルトガル海上帝国の貿易港 大航海時代の痕跡を求めて

マカオが歴史の表舞台に登場した大航海時代。ユーラシア大陸の端に位置するリスボンから船出をし、喜望峰を回航、インドのゴア、そしてマラッカを経て、数多の危険を冒しながらはるばるマカオに至ったポルトガル艦隊には、中国や日本とヨーロッパとを結ぶ中継貿易の推進・強化と並んで、当時危機に立たされていたローマ・カトリック教をアジアの地に布教するという重大なミッションが課されていた。

大航海時代のマカオには海からの侵略に対する防衛のため、ポルトガル人によって各所にいくつもの強固な要塞が築かれたが、それらは教会を伴うのが常であった。ギア要塞にも「ギアの聖母教会」が建ち往時をしのばせている。中国最初の西洋式灯台のギア灯台を併設。

ポルトガルの東洋における中継貿易の最前線基地

国土回復運動によってイスラム勢力をイベリア半島からアフリカ大陸へと駆逐したポルトガルは、その余勢を駆って航海者バーソロミュー・ディアスに、アフリカ大陸最南端を回航する喜望峰航路を開拓させる（1488年）。そしてヴァスコ・ダ・ガマの西インド航路開拓（1498年）、さらにマゼラン艦隊の世界一周達成（1522年）によって、ポルトガルは全世界規模に広大な版図を有する「ポルトガル海上帝国」へと飛躍した。

ヨーロッパとマカオとを結ぶ「海のシルクロード」は、テージョ川の河口近くに拓けたリスボンが起点。ポルトガル船団は大西洋から喜望峰を経てインド洋に出ると、季節風を利用しながら一路東へ。アフリカ大陸東岸のモザンビーク、インドのゴア、マレー半島のマラッカと寄航しながらマカオに至った。

中国大陸に初めて足跡を印したポルトガル人は、ジョルジェ・アルバレスだといわれる（1513年）。その後、相次いで来航したポルトガル人はやがてマカオに定住。1557年、近海に暗躍する和寇討伐の見返りとして、当時の中国王朝、明帝国からマカオの居住権を取得。以後、ポルトガルはマカオを最前線基地として、中国や日本とヨーロッパ間を結ぶ中継貿易に乗り出していく。

交易と一体化して進められたアジアへのカトリック布教

スペイン、フランスと並ぶローマ・カトリック教国であったポルトガルは16世紀、ヨーロッパ全土に広がりつつあった宗教改革およびカトリックからの諸派分離に危機感を覚え、また中央アジアに君臨するイスラム勢力と対峙するため、巨万の人口を抱える中国やアジア諸国に着目。折しも結成されたイエズス会を先兵とし、カトリック布教のための宣教師を派遣する。

マカオを布教活動の拠点と位置づけた彼らは、故郷リスボンを思わせる七つの丘を持つ起伏に富んだ半島部に次々と教会を建築し、やがて始まる中国本土や日本への布教の態勢づくりを急いだのだった。

(左)ターコイズブルーに塗色された天井や、日光を浴びて輝くステンドグラスが美しい聖ローレンス教会の内部。聖ローレンスは航海者たちから信仰を集めた聖人である。(右)1560年以前にイエズス会によって建てられた聖ローレンス教会は、マカオに現存するもっとも古い教会のひとつ。かつては海辺に面しており、船乗りやその家族の心の拠りどころとなった。そびえる左右対称の塔が、天上の神に向けた信仰心の篤さを表している。

世界遺産の教会巡りの旅はセナド広場を境に、南北に分かれてコースをとると効率がよい。南に向かうと聖オーガスティン教会や聖ローレンス教会が、北に向かうと聖ドミニコ教会やカテドラル、そして聖ポール天主堂跡がある。セナド広場に面したポルトガル建築の民政総署は内部のアズレージョが実にみごとで必見。

セナド広場から聖ドミニコ教会を経て聖ポール天主堂跡までは歩行者天国になっており、土産物店を冷やかしながらの気ままな散策が楽しめる。レモンイエローのファサードが青空によく映えて異国情緒が色濃い聖ドミニコ教会周辺。

絵葉書に添えて、お土産に、利用価値の高い美しい切手

エキゾチックで美しいマカオの風景を、切手という形で持ち帰ってみてはいかが。セナド広場に面した郵政局本店をはじめフェリーターミナル、マカオ国際空港などの郵政局でさまざまな絵柄の美しい切手を選べる。

マカオでは切手の発行が盛んで、発行頻度も高い。世界遺産やマカオの風景を扱った定番のものから、マカオ・グランプリなどイベント関連のものまで幅広いバリエーションが魅力。コレクターならずとも胸が熱くなること必至だ。

「澳門街道」というマカオ各地の通りを取り上げたシリーズものの切手の一葉。ラザロ地区の美しい通りが淡い筆致でみごとに再現されている。

ポルトガル人が定住したマカオ半島南部

16世紀にポルトガル人が最初に定住したとされるマカオ半島南部に、清水がこんこんと湧き、渡来人の喉を潤したというリラウの泉があった。リラウとはポルトガル語で「山泉」を表し、「リラウの水を飲んだ者は決してマカオを忘れることはない――」という郷愁を誘う美しい詩歌となって当時の様子を今に伝えている。泉のあった場所は現在、リラウ広場として整備され、世界遺産にも登録されている。周囲には、船乗りの妻たちが石段に腰掛け、季節風に乗って夫たちが無事に帰還できるよう祈ったことから広東語では「風順堂」とも呼ばれる聖ローレンス教会をはじめ、聖オーガスティン教会、聖ヨセフ修道院とその聖堂など世界遺産に登録された教会や建物が集まり、マカオの歴史に思いを馳せながら歩くのに最適だ。

カトリック教会にカルサーダスマカオはリスボンによく似た街

マカオに居を定めたポルトガル人は、リスボン同様に起伏に富み、また水辺に開けたマカオに自らの故郷をなぞらえて、各地に教会を建て、また石畳(カルサーダス)を敷き詰めた公園を整備するなど、リスボンの街並みを模して街づくりを行った。その結果、マカオの七つの丘の頂上には教会や修道院、砦などポルトガル色の濃い建物が多く残っている。

より天に近い場所に神への祈りの場を設けた大航海時代のポルトガル人。マカオの街には彼らの望郷の念が強く込められている。そんな旧市街で、七つの丘を巡って世界遺産の教会群を訪ねよう。中国返還後の今日でも、マカオには多くのポルトガル人が住み続けているから、世界遺産散策の合間には中国語が堪能な青い目の西洋人の姿を見ることもあるだろう。

モンテの丘とギアの丘の間に位置するラザロ地区は、洋館が建ち並び、カルサーダスが敷き詰められた南欧風のエリア。聖ラザロ教会や聖ミカエル墓地のほかギャラリー、ポルトガル雑貨店、レストランなどもあり散策が楽しい。夜間はほのかな街灯に照らされて、まるでリスボンの小路を歩くよう。

GOOD OLD MACAU

七つの丘を登って主の御元へ近づく

七つの丘を持つ街リスボンになぞらえるほど丘の多い地形のマカオ半島。海辺に面してマカオ市民の居住地域が、そして丘を登っていくと美しいファサードを持つカトリック教会が、それぞれ位置している。ポルトガル人が最初に定住したマカオ半島南部は世界遺産が数珠つなぎのように現れる散策が楽しいエリアだ。

司教座を持ち、マカオにおけるカトリックの総本山といえるのが、セナド広場や南灣大馬路にも近い大堂(カテドラル)。石畳と噴水がみごとな大堂広場と併せて世界遺産に登録されている。内部の美しいステンドグラスは必見。

マカオ越しに見る中世日本の風景

はるか大航海時代に、今日まで残る教会群を建設し得るほどの規模を誇ったマカオの富の源泉は、黄金の国「ジパング」日本の石見銀山から流入する銀であった。物の交流は、必ず人の交流を伴うもの。マカオへと渡った日本人は多い。マカオを通して、統一国家の成立から開国、そして一転鎖国へと向かう中世日本の風景が透けて見える。

1602年から1640年にかけて建てられた聖ポール天主堂。建設時期は日本におけるキリスト教禁教期と重なり、マカオに逃れたキリシタンも建設に加わったと伝えられている。1835年の大火で礼拝堂と神学校は焼失、ファサードのみが立ち続ける。

南蛮貿易をきっかけに始まった マカオと日本との歴史的な関係

マカオのシンボルといえば聖ポール天主堂跡。モンテの丘にそびえる5層、石造りのファサード（教会正面の壁）は、主である教会部分を失ってなお優雅かつ壮麗に立ち続け、常に観光客でにぎわっている。セナド広場からはゆっくり歩いても10分足らずで、その参道には土産物店やレストラン、カフェ、さまざまな商店が並んでにぎやかだ。周囲には聖ドミニコ教会や三街会館、カテドラル、盧家屋敷など、西洋と東洋、双方の文化を背景にした世界遺産の建築物が集まり、旧市街散策のハイライトを形成している。

日本史では江戸開幕後にあたる17世紀に建てられたこのファサードは、その装飾に聖フランシスコ・ザビエルの像や、徳川家康に似せた龍など、日本とも関連のある風物が刻まれている。マカオと日本との歴史上の結びつきは濃く、また深い。そのきっかけとなったのがポルトガルと日本との交易（南蛮貿易）であり、マカオはポルトガル船団の遠洋航海を支える重要な寄港地だった。

ローマへの途上に立ち寄った 天正遣欧使節の少年たち

1567年には長崎にポルトガル船団が来航し、石見銀山で採れた良質の銀を買い付けるなど、ヨーロッパと中国、日本とを結ぶ中継貿易は盛況の一途をたどる。その過程で、中継地としてのマカオも繁栄を謳歌し、聖ローレンス教会など今日も残る教会群の建築が進められた。1582年、大友宗麟ら3大名によって、ローマ法王に謁見するために派遣された天正遣欧少年使節も、その洋行の途上、そして帰路と、マカオに長期滞在している。

潮目が変わったのは1587年、豊臣秀吉によるバテレン追放令がきっかけだ。そして徳川幕府によるキリスト教禁止令が出される（1614年）。さらに1637年には、宗教戦争の面を併せ持つ島原の乱が起こる。これをきっかけに幕府は1639年、ポルトガル船来航禁止令を出し、約90年間継続したポルトガルとの関係を断交。以後、マカオと日本との距離も遠いものになっていく。

しかしながら、禁教下の日本を逃れたキリシタンたちが新天地と目したマカオには当時の日本人たちの足跡が残り、歴史の大波の向こうから21世紀の観光客を、時空を越えた旅へと誘い続けている。

ファサードの背後のかつて主祭壇があった場所は地下納骨堂となり、約60人の日本人を含む殉教者たちの遺骨が安置されている。併設の天主教藝術博物館には肖像画や宗教画、聖母子像などカトリック関連の展示品が並ぶ。

天主教藝術博物館に展示されている銀細工。石見銀山が産した銀を用いたともいわれる。

地下納骨堂入口には日本人殉教者の名が日本語で記されている。

（左）聖フランシスコ・ザビエルの遺骨を納める聖ヨセフ聖堂。ザビエルは1549年から1551年まで日本に滞在し織田信長にも接見。後に中国本土へ向かう途上、マカオから近い上川島で病没。遺骨の一部は日本に運ばれたが禁教下のため、マカオに運ばれ安置された。（右上）天井にイエズス会の紋章が輝く聖ヨセフ聖堂内。（右下）中央のケース内に右上腕骨が収められている。

歴史好きなら必見のマカオ博物館 日本はじめ各国との交流史が豊富

聖ポール天主堂跡に隣接するかつてのイエズス会の軍事施設モンテの砦。天然の要害を活かした砦内には1999年、マカオ博物館が整備され、マカオの歴史と文化をさまざまな視座から紹介している。

日本とマカオとの関連でいえば、ヨーロッパからマカオを経由して日本に伝来した活版印刷機の展示（模型）が最重要といえる。日本人も暮らした大航海時代のマカオの様子がわかる資料も多く、歴史散歩の際に立ち寄れば多くの収穫が得られる。

紀元前から現在までに至るマカオの歴史を俯瞰できる。カフェもあり休憩にも向く。

緑に囲まれたモンテの砦はマカオ市民の憩いの場。散策に、太極拳に、みな思い思いに時を過ごす。

マカオにおける日本人の足跡をたどる旅の過程で足を運びたいのが、媽閣廟前の海事博物館。大航海時代のマカオに関する展示のほか、鉄砲伝来や黒船、南蛮屏風など日本に関する展示も充実している。

聖母マリアや天使の像などで彩られた聖ポール天主堂のファサードは「石の説教」といわれ神の教えを体言する。イエズス会創立メンバー、聖ザビエルの像。

ファサードの装飾には東洋的な要素も垣間見える。聖母像に抑えられる七つの頭の龍は禁教令を発した徳川家康を見立てているという説も伝わる。

活気に満ちたマカオ半島北部を散策中に立ち寄りたいオアシス的な存在がロウリムイオック庭園。広々とした池に架かる蛇行するかのような橋や点在する東屋が独特の景観をなす蘇州様式の庭園で、盧家屋敷の主人の盧華紹が愛した。池に蓮の花が咲き乱れる夏期はみごとな眺め。

マカオ最古にして最大の中国寺院の媽閣廟は航海の女神「媽祖」を祀る。その前の石畳が美しいバラ広場とともに世界遺産に登録。ポルトガル人が最初に上陸した地とされる。

セナド広場から聖ドミニコ教会を経て、大堂(カテドラル)へ向かう世界遺産めぐり。その途上の坂道にたたずむ盧家屋敷もまた世界遺産に登録されている。1889年に建てられた豪商の館で、華南地方に多く見られるレンガ造りの外観、採光と風通しをよくするために建物内に設けられた中庭など、中国の伝統的な建築様式だが、美しいステンドグラスなどに西洋の影響が見てとれる。

味わいの尽きない濃密な中国文化にふれる

GOOD OLD MACAU

東西文化の交差点としての歴史的意義が高く評価され、世界文化遺産に登録された「マカオ歴史市街地区」。この文化的空間にはカトリックの教会など西洋の文物のみならず、いくつもの中国寺院や中国建築が建ち並び、マカオの魅力がポルトガル文化のみに由来するのではないことを語っている。

歩いてこそ見えてくるマカオ独自の魅力

マカオの魅力の真髄が、マカオ半島の旧市街、西洋と東洋とが融合した世界遺産「マカオ歴史市街地区」にあることは論を待たない。そしてその世界遺産は、教会や廟などの個々の点(スポット)ではなく、それらが一体となった面(エリア)として登録されたことに特徴がある。つまり旧市街そのもの、いってみれば人々が集まる茶樓や中国風喫茶店の茶餐廳(チャーツァンティン)、石畳の小路、商店街のざわめきなど、マカオ市民の生活の場そのものが世界遺産だ。

そんな「マカオ歴史市街地区」を体感するには、歩くのが一番だ。マカオ半島最南端の媽閣廟を皮切りに、縫うようにマカオ半島を北上すれば、約4キロの行程に22の歴史的な建築物・史跡と8カ所の広場が数珠つなぎのように展開し、世界遺産完歩を達成できる。

旅人がそこで出会うのは、ポルトガル人の足跡のみならず、参拝者の祈りが込もった渦巻き線香が静かに燃える中国寺院、歴史に名を刻んだ中国人豪商の館、民間信仰が伝わる小さな廟などだ。これら中国に由来する文物が外来のポルトガル文化と共存、共鳴し、さらにはゆったり流れる東洋の生活風景とが溶け合うことで、他に類を見ない興味深い空間が構成され、また訪れた人々を魅了し続けている。

マカオ市民とともに楽しむきらびやかな広東オペラの奉納

広東地方に隣接し、日常会話に広東語が用いられるマカオでは香港同様、広東オペラの公演が盛んだ。

広東オペラとは華南地方の伝統歌劇で世界無形文化遺産にも登録。色鮮やかな化粧や衣装をまとった演者が歌を交えながら劇を進める。三国志や水滸伝など歴史小説が題材になることが多く、広東語で上演される点が京劇と異なる。北帝廟の北帝祭、譚公廟の譚公祭など中国寺院のお祭りの際に奉納されるので、多くのマカオ市民とともに楽しんでみては。

華南地方の豊潤な文化のひとつとしてぜひ体験したい広東オペラ。廟の前の広場に大きな竹組みの特設会場が設置され、そのなかのステージで奉納される。

ロウリムイオック庭園に隣接するマカオ茶文化館は中国茶や茶器に関する展示が楽しめる。

(右)ポルトガル人が遺した教会が点在するマカオ半島南部に対し、半島を北上するにつれて街並みには中国色が濃くなる。観音堂や蓮峰廟など中国寺院も多く、大小の市場が喧噪を呼ぶ。(左)かつて遊郭もあった艶っぽい雰囲気はそのままに観光客向けのレストランや土産店が並ぶ福隆新街。昔日の面影が随所に残るマカオにあって、特に古きよき面影を残す通りで散策が楽しい。

かつてのポルトガル人官吏の別荘を利用したタイパ・ハウス・ミュージアム。のどかな水辺に臨んで建つ様は一幅の絵画のような美しさ。かつてこの地に居を構えたポルトガル人の生活様式が再現された館内は見学可能。

タイパ・ビレッジのメインストリートの官也街は通称フードストリート。ポルトガル料理から中国料理までレストラン多数。マカオ特選アーモンドクッキーなど菓子類のお土産も豊富で、観光客でにぎわう。公設市場に隣接し、ローカルな雰囲気も残る。

郷愁誘う「その先のマカオ」タイパとコロアンへの旅

GOOD OLD MACAU

世界遺産が集中するマカオ半島から、3本の橋で結ばれているエリアがタイパ。さらにコタイをへだてたその先がコロアンで、マカオ半島とはまた異なる郷愁、旅情、抒情が味わえる。近未来風景が広がるコタイと隣接しながら昔日の面影を残すこの両エリア、じっくり時間をかけて歩きたい。

コタイからタイムスリップ古きよきタイパ・ビレッジへ

中国大陸と地続きのマカオ半島。その沖合に位置するタイパとコロアンは、かつてはそれぞれ独立した島であったが、埋め立てによりマカオ半島部よりも面積の広いひとつの島となっている。タイパにはマカオ国際空港が建設されたほか、かつてのタイパとコロアンの間の埋め立て地がエンターテイメント空間コタイとして開発された。

タイパは近年、急速に人口増加が進み、中心部には高層マンションが建ち並ぶが、かつての海岸線に近いタイパ・ビレッジにはパステルカラーの南欧風建築物、ノスタルジックなカルモ教会、そして石畳の路地といった古きよき風情がたっぷり残る。近未来風のコタイからも近く、チェックイン後の夕方、散歩がてらポルトガル料理のレストランを求めて訪れれば新旧マカオの対比を味わえる。

豊かな緑と海辺が彩るのどかな漁村のコロアン

一方のコロアンは、海や山、緑といった自然に恵まれた環境。カジノがないため静寂に包まれながら過ごせるとあって、香港などからリゾート客が多く訪れる。

マカオ半島からの路線バスが停車するコロアンの中心、コロアン・ビレッジには昔ながらの漁村風景がまだまだ残り、マカオの原風景といった風情だ。

車もめったに通らないのどかな海岸通りの十月初五馬路には年月を経たガジュマルの大木が並ぶ。聖フランシスコ・ザビエル教会、道教寺院の譚公廟といった名所もこの通り沿いにあり、静けさにあふれる入り組んだ路地裏とともに遠来の観光客を奥へ奥へと誘っている。

南欧風石畳(カルサーダス)が敷き詰められた広場に向かい、パステルカラーのファサードが印象的な聖フランシスコ・ザビエル教会。コロアンののどかな空気に溶け込んだ素朴さが心地よい。

中国語とポルトガル語が併記されたアズレージョの標識が街灯に照らされてエキゾチックな雰囲気に。

夕食後は夜風に吹かれて散策を中洋折衷が美しい夜のタイパ

官也街とその周辺に美味しいレストランが集まるタイパ中心部。ディナーの後は、腹ごなしに散策を。官也街から一歩その奥へ分け入ったエリアは、いくつもの路地が枝分かれしてまるで迷路のような趣だ。

中国風の住宅と、パステルカラーのポルトガル風建物が混在し、街灯のほのかな灯りに浮かび上がる様が美しい。あてもなく歩くうちに見つかる小さなレストランやカフェにデザートを求めて立ち寄るのもおすすめだ。

東西文化の融合を実感する豊かな食文化

アフリカン・チキンは大航海時代の味

マカオを特徴づける要素の筆頭にミックスカルチャーがあるが、その重要な要素のひとつとして食文化が挙げられる。単に西洋と東洋のフュージョンということにとどまらず、広くアジア圏の食材を取り入れたマカオ料理は、いうなれば大航海時代の味。またポルトガル料理や中国料理も、庶民的な店からファイン・ダイニングまで、広く本場の味が楽しめる。

マカオ料理はシェフによってレシピはさまざま。とくにアフリカン・チキンは、なによりソースの味わいが命で、シェフたちがもっとも心血を注ぐ部分でもある。ポルトガル料理との間に明確な区別はなく、マカオにおいてはポルトガル料理レストランでもアフリカン・チキンをはじめマカオ料理を出すのがふつうだ(アントニオ・レストラン)。(下)さまざまな店のアフリカン・チキンを食べ比べ、自分好みの味を探すのもマカオ歩きの醍醐味のひとつ。

中国文化の影響濃いマカオ料理だけに、チキンのグリルにはフライパンではなく、中国人に馴染みの深い中華鍋を用いるシェフも(ヘンリーズ・ギャレー・マキシム)。

ポルトガル料理ベースに寄港地の味わいをミックス

マカオ料理とは外来のポルトガル料理をベースに、地元の広東料理をミックスさせたもの。しかしその両者の間には、ポルトガル人がヨーロッパを発ち、「海のシルクロード」を経てマカオに至るまでの間に収集したさまざまな食材やスパイス――たとえばアフリカの鶏肉、インドのカレーや胡椒、そしてサフラン、マレー半島のココナッツなど――がふんだんに加えられ、いわば「大航海時代の味」ともいえる独特のフュージョン料理を構成している。

その代表的なメニューといえば「アフリカン・チキン」。

半羽の鶏肉をじっくりグリルし、ココナッツ、カレー、ガーリック、オニオン、チリ、ピーナッツなどをベースにした濃厚でスパイシー、複雑で深みのある味わいのソースとともにいただく、大航海時代の味覚を一皿の上に凝縮した料理だ。店によって味わいが大きく異なるので、食べ比べも楽しめる。

時間をかけて味わいたいマカエンセの家庭料理

もともとマカオ料理は、来航したポルトガル人と現地の中国人との間のエスニックグループを指すマカエンセの家庭料理。ソースが味わいの決め手のアフリカン・チキンはもとより、煮込み料理の定番「タッチョ」など、時間と手間暇をかけた献立が中心となる。パンよりごはんが欲しくなる味わいなのも特徴だ。

マカエンセはまた、食事を大事にする習慣を持つ。毎晩、必ず、家族や友人とテーブルを囲み、ポルトガルワインとともに温かいマカオ料理とを会話とを、時間をかけて楽しむマカエンセを見習い、旅先の一夕、マカオ料理をじっくりと堪能したい。

1マカオではポルトガル料理をはじめフレンチ、イタリアンなど各種西洋料理も人気で、カジュアルなレストランからファイン・ダイニングまで幅広くチョイスできる。多くのシェフが本国から招聘され指揮をとるのも国際都市マカオならでは(ギャラクシー・マカオの地中海料理テラッツァ)。2日本ではなじみの薄いポルトガル料理だが、マカオではポルトガル人シェフが腕をふるうレストランが多く、本場の味を堪能できる(ホテル・ロイヤルのファド)。3ギャラクシー・マカオのインターナショナル・ブッフェのフェスティバはポルトガル料理も充実。家族で、あるいは友人と気軽に訪れたい。4ほとんどの高級ホテルではラウンジやダイニングで本格的なアフタヌーン・ティーを楽しめる。伝統的な英国式のみならずエッグタルトなどマカオらしいデザートがサーブされることも(ポウサダ・デ・サンティアゴ)。5味わいのみならず見た目もエキゾチックなポルトガル料理&マカオ料理。特にバカリャウ(干しダラ)のコロッケやダック・ライス、イワシの炭火焼は必ず味わってほしい代表的なメニュー。6豪快な子豚の丸焼は野趣あふれるいかにもポルトガルらしい味覚。

バラエティに富んだミシュランガイドの名店

豊かな食文化で知られ、世界中から食通が訪れる香港とマカオのこと、両エリアを扱う「ミシュランガイド香港マカオ」が2009年版以来、毎年版を重ねている。創刊以来の3つ星常連、フレンチの「ロブション・オ・ドーム」(グランド・リスボア内)を筆頭に、それぞれ個性的な中国料理レストランなどが掲載。ファイン・ダイニングだけでなく、街歩きついでに立ち寄れるコストパフォーマンスにすぐれたレストランも多く紹介されている。

ロブション同様にグランド・リスボア内にある広東料理「エイト・レストラン」もミシュランガイドの常連で3つ星も獲得。アラン・チャン氏が手掛けた内装は「8」「金魚」「水」がモチーフ。

1香港、マカオ、中国本土の珠海を結ぶ総延長約50km（橋梁部35.6kmで一部区間は海底トンネル）の港珠澳大橋。2016年末予定の完成後は、香港国際空港とマカオ間はバスで所要30分ほどで結ばれる（写真提供／港珠澳大橋管理局）。2着々と工事が進む「マカオ・ライトレール（Macau LRT）」（写真提供／運輸基建辦公室）。マカオ半島北端の出入境ゲートからタイパ、コタイをマカオ空港経由で結ぶ。車両は三菱重工業製。32015年に開業予定の「マカオ・スタジオ・シティ」はハリウッド映画がテーマの新感覚リゾート。

1かつてマカオは、中国大陸から世界各地へ輸出される中国茶の集積地のひとつだった。その伝統から中国茶の専門店が今も残る。2街歩きの際に立ち寄りたい中国風喫茶店。牛乳プリン、クルミやロンガンなどさまざまな木の実を使ったお汁粉、豆腐花などの中国デザートは昔懐かしい味。3ゆったりしたスピードで走るペディ・キャブの姿も昔ながらのマカオの風景。リスボア・ホテルや媽閣廟の前などで客待ちをする風景も実に絵になる。

1全室スイートのポウサダ・デ・サンティアゴはマカオ半島南端に建つ。かつての要塞跡を改築しただけに、随所に往時の面影を偲ばせている。ロビーには洞窟をくりぬいた階段を通ってアプローチ。2コロアン南端にあってチョクワン・ビーチを一望するロケーションのポウサダ・デ・コロアン。リゾート感覚にあふれた環境で静かな滞在を。3現地の観光学校の学生が運営に携わるポウサダ・デ・モンハはマカオ半島北部の下町、モンハの丘中腹に位置する。ここを拠点に活気あふれる下町散歩を楽しもう。

1おしゃれな「カフェ・ベラ・ヴィスタ」（グランド・ラパ・マカオ内）で午後のティータイムを。ポルトガルを代表するスイーツのセラドゥーラがおすすめ。2大航海時代の大海原を想起させるセナド広場を彩るカルサーダス。石畳の歩道ではカニや魚などかわいらしいモチーフの装飾を見つけることも。3さまざまな絵柄のアズレージョが街をひときわエキゾチックに。アズレージョはポルトガル独特の装飾絵タイル。かわいらしい模様から宗教画まで、その表現力は実に幅広い。

次の休みにはマカオへ 帰ろう

約30.3㎢で世田谷区の半分ほどと手ごろな面積に、おもちゃ箱のように楽しみ方が凝縮しているマカオでは、訪れる度に発見や出会いがある。初めての滞在で都市型リゾートライフと世界遺産歩きを満喫したら、次回の旅では「その先のマカオ」へ出かけよう。あなただけの「マカオの休日」がきっと見つかるはず。

ちょっとしたことに心惹かれる なんかかわいいマカオ

中国風の街並みのあちこちにポルトガルが顔を出し、ちょっとしたことに心惹かれるマカオ。街を歩けばすぐに目に飛び込んでくるのが、道路標識のアズレージョだ。濃くあざやかなブルーに中国語とポルトガル語が併記され、石畳のカルサーダスと並んでいかにもマカオらしい。

かわいらしい絵柄のアズレージョは道端の小さな噴水やポルトガル学校の壁などあちこちで目にできる。散策中のひと休みには、伝統的なポルトガル風スイーツを出すカフェでゆっくり時間を過ごそう。

ノスタルジックな旅の宿 ポウサダに泊まってみよう

02

マカオが気に入り渡航回数が増えてきたら、いつもとは気分を変え、小ぢんまりした隠れ家風ホテルに荷を解いてみてはいかがだろう。マカオにはポルトガルの国営ホテルを指す「ポウサダ」をホテル名に冠した宿が3軒ある。

いずれもポルトガル・テイストにあふれた旅籠風ホテルという点では共通するが、立地や雰囲気は三者三様の異なるたたずまい。居心地のよい客室やガーデン、ダイニングを備えているから、終日ホテル内で読書三昧を楽しむといった過ごし方にもぴったりだ。

変わらないのが逆に新鮮な 昔ながらのオールド・マカオ

03

近未来都市コタイに対し、マカオ半島の旧市街には、しっとりした風情のオールド・マカオが広がる。古きよきマカオを求め、時をさかのぼる旅に出よう。

朝一番に楽しみたいのがローカルな茶樓での飲茶。早朝7時過ぎから三々五々人々が集まり、中国茶に思い思いの点心をつまみながら世間話に花を咲かせる。日中は地元の人向けの商店街をそぞろ歩き。中国茶や乾麺、菓子などの専門店でお土産探しも楽しい。夜はレトロな魅力にあふれるドッグレース場に足を運んでみては。

急速に変貌を続けるマカオから 夢にあふれる未来都市が見える

04

世界遺産の街マカオは一方で、変貌を続ける「現在進行形の近未来都市」としての顔も持つ。香港～マカオ～珠海を結ぶ海上大橋の建設、旧市街とコタイを結ぶLRTの整備、続々と開業する斬新な外観の大型ラグジュアリー・リゾート。近い将来のマカオの風景は、SF小説の挿絵が描く未来都市さながらだ。

東洋と西洋の間を行き来するだけでなく、大航海時代から未来へと続く時間軸をも自在にたどるマカオの旅。夢にあふれる未来地図を探しにマカオへ出かけよう。